台湾・国立東華大学

プログラム

SUSAP 2025 SPRING　2.17~3.23

参加者プロフィール

宮﨑小遥（団長）

芸術地域デザイン学部３年

「今回リーダーを努めさせていただきました！台湾の人と文化が大好きです♡35日でタピオカを15杯飲んだのはいい思い出です。」

後藤正太（副団長）

経済学部２年

「プログラム期間中に20歳の誕生日を迎え、たくさんの方にお祝いしてもらったこと！」

安東愛良

芸術地域デザイン学部３年

「思い出は食堂の抹茶鮮奶。今でも思い出して飲みたくなります！」

福永寧音

教育学部３年

「ルームメイトとバディ達とみんなでバディの卒業写真を撮ったことが思い出です！」

永松七海

芸術地域デザイン学部２年

「食べることとおしゃべりが大好き！たくさんお友達ができてすごく楽しかったです！」

堺梨音

芸術地域デザイン学部２年

「面白いこと大好き！人生大爆笑がモットー。毎日を全力で楽しんでバディや授業で仲良くなった友達とローカルな場所に行ってローカルフードを楽しみ尽くしました！また行くぞ〜！」

福岡愛子

理工学部２年

「最高の35日間でした！バディ達と一緒に台北、宜蘭、夜市、ホエールウォッチング、七星潭などたくさんの場所に行ったこと全てが思い出です！！」

檜室圭輝

経済学部１年

「台湾映画で台湾に興味をもち、SUSAPに参加しました！我喜歡小籠包^ ^」

大村美貴

農学部 2 年

「圧倒的お姉さん感！ずっとついて行きたくなります！みんなに優しいみきさんは、様々な場所に訪れ、友達を作り、最高の日々を過ごしていました♪」

阿部好花

教育学部 1 年

「No Panda, No Life!! パンダ愛が止まらないかちゃん！可愛いだけじゃなく、努力家で、英語力もどんどん進化中。これからのかちゃんに、パンダ並みに大きな期待が膨らんでいます！」

鬼束響生

芸術地域デザイン学部1年

「台湾研修での学びは自分の将来へ繋げていくための第一歩になりました。」

田中志歩

医学部 1 年

「今回の留学で日本では体験できないことがたくさんできて、毎日幸せでした〜」

坂本陽菜

経済学部 1 年

「好きな台湾料理は牛肉麺と小籠包。みんなで夜市に行ったことと、大学内で犬に追いかけられたことが良い思い出。」

豊福愛梨

農学部 1 年

「毎日深夜まで皆とトランプをしたことが思い出です！」

豊福円香

農学部 1 年

「台湾の学生たちと一緒に遊んだバレーボールやトランプが本当に楽しかった！」

土井和奏

農学部 1 年

「今回の研修で一番印象に残っていることは、キリスト教の勧誘!!趣味は、fruits zipper の歌を聴くこと。」

プログラム概要

【期間】

2025 年 2 月 17 日～3 月 23 日（35 日間）

【留学先】

国立東華大学（台湾花蓮市）

【内容】

東華大学では様々な分野の授業が多数英語で開講されており、各国からの留学生や台湾人学生とともに英語で開講されている授業を受けることができる。

期間も長く、各自の関心や目的に応じて授業に参加できるため、本格的な留学体験が得られる。

【東華大学について】

東華大学は台湾の東海岸にある花蓮市郊外にある。花蓮は自然が豊かでキャンパスは山に囲まれた立地で校内には大きな湖がある。

学部は理工学部、人文社会学部、管理学部、原住民民族学部、海洋科学部、教育学部、環境学部、芸術学部の 8 つである。

【授業】

授業は月曜日から金曜日の中で各自２０を超えるように履修した。一つの講義は 2 から 3 コマで構成されており、１コマは５０分あり休憩は 10 分であった。英語力向上を目的とする語学の授業は、レベル別に開講されている。さらに教養科目や専門科目の授菜を英語で受講することができ、中国の授業にも参加できた。

【バディとの交流】

佐賀大学の学生 1 人につき東華大学の学生バディが２～３名ずつ紹介され、私たちの大学生活のサポートをしてくれた。バディ以外にも授業で仲良くなった人とも交流があり、サークル活動や小旅行など、放課後や週末も充実した時間が過ごせた。

【大学の寮】

東華大学のキャンパスは広大で学生寮も大学の中にあり、ゆったりとした学生生活を体験できた。滞在した寮は 4 人部屋で机とベッドが一人ずつ用意されていた。トイレとシャワー、洗面台も部屋の中にあった。洗濯機や乾燥機、冷蔵庫、電子レンジは共用であった。

【食事】

台湾では外食文化が根付いており朝昼晩すべてを外食で済ませることが主流であった。そのため、朝から晩まで多くの店舗や屋台が営業していた。また、夜市文化がありお祭りのような雰囲気を楽しむことができる。

東華大学の学食には多数の店舗があり、ルーローファンや小籠包、タピオカミルクティーなどの台湾の定番料理は学食でも楽しむことができた。

屋台や地元の食堂での食事は非常に安価で 1 食あたり 70～150 台湾ドル程度で楽しめた。地元のカフェや飲料店ではタピオカミルクティーなどの飲み物が 40～80 台湾ドル程度で購入することができた。（1 台湾ドル＝葯 4.7 円）

「SUSAP 台湾研修を終えて」
芸術地域デザイン学部 3 年　宮﨑小遥

この留学で、私の世界は大きく広がりました。かけがえのない友達と、忘れられない思い出を作ることができ、自分だけの貴重な経験ができました。

私の留学の目的は「海外での生活を経験する」「多角的視点を身につける」「台湾の芸術文化を現地で学ぶ」でした。目的に対しての経験をいくつか書きたいと思います。

「海外での生活を経験する」「多角的視点を身につける」ことについて、日本と異なる文化を体験することで、生活習慣や価値観にどのような違いがあるのかを経験したいと考えていました。
大学では、週に 20 時間の授業を受けました。主に英語開講されているクラスを選びましたが、加えて、初心者向けの中国語の授業も受けました。中国語は初めて学習する言語だったため、発音や文字が難しいと感じることがありました。ですが、一つ一つ学んでいく過程が楽しく、意欲的に授業に参加することが出来ました。
さらに、台湾の学生向けの日本語の授業では、日本や日本文化に興味を持っている多くの学生と出会いました。お互いの文化について会話したり、課題を協力して進めたりする中で、自然と交流が深まり、良い関係を築くことができました。
また、休暇はバディやルームメイトと台湾の様々な食べ物を食べたり、観光地を巡り、楽しい時間を過ごすことが出来ました。野菜たっぷりのサンドウィッチや蛋餅など安くて美味しいご飯を食べることが出来るので、台湾のブランチの文化が好きになりました。特に、旅行で訪れた高雄で見た夕焼けは素晴らしく、息をのむほど美しいものでした。

「台湾の芸術文化を学ぶこと」について、私は現代美術に興味があり、街中の広告デザインや美術館を訪れることで、台湾の芸術文化を学びました。
台湾の広告デザインは、カラフルで目を引くものが多く、視覚的な楽しさや色使い、レイアウトに重点が置かれていると感じました。日本の広告とはまた違った魅力がありました。
私が特に印象的だったのは「駁二芸術特区」という商業施設です。台湾には「文化創意産業」と呼ばれる、古い倉庫をリノベーションした建物があり、クリエイターのアート作品を鑑賞できるスポットや、雑貨店、飲食店などが集まる観光地として、各地に点在しています。歴史を感じながらも新しいアートに触れることができるこの場所は、私にとって非常に興味深いものでした。台湾には、こうした歴史と現代をつなげるアートが多く、散策するだけでも、とても楽しかったです。

この短期留学で、私は台湾について現地で学ぶことができ、またその文化や歴史に対する興味がわきました。台湾の食文化、芸術、そして人々の温かさに触れたことは、私にとって貴重な経験でした。台湾のことをもっと学びたいという気持ちが強くなり、帰国後も学びを続けたいと考

えています。
その中でも、台湾の学生たちの文化理解の深さはとても印象的でした。彼らは、日本について非常に興味があり、時には私たち日本人よりも日本の文化や習慣について知識が豊富でした。そのため、私が自国の文化について質問されたときに、説明できないことがあり、悔しい思いをすることがありました。このことは、自分の国についてもっと学ばなければならないという意欲を高めさせてくれました。

また、私は、今回の留学でリーダーを務めました。日本人学生たちの不安を取り除くために、日々サポートすることを心がけ、何か困っていないかと聞きながら、グループ全体がより良い留学生活を送れるように努めました。
最初はいくつかの問題が発生し、リーダーとしての責任を果たせるか不安でしたが、報告や連絡をこまめに行うことを呼びかけました。時には、厳しいことを言ってしまうこともありましたが、その結果、参加者全員が協力し合い、真摯に問題に向き合うことで、問題を解決することができ、充実した日々を送ることができました。

全体を通して、留学生活は非常に充実しており、毎日が新しい学びと発見の連続でした。この経験を通じて、多角的な視点を持つことができ、また自国の文化や他国の文化について深く考えることができました。

最後に、お世話になった台湾のバディをはじめ、この留学に関わってくださった先生、仲良くしてくれた友達、一緒にプログラムに参加した15人の頼れる仲間たち、様々な面でサポートをしてくれた両親に心から感謝したいと思います。

彼らとの交流が、私にとって大きな成長の糧となり、素晴らしい留学生活を送ることができました。

本当にありがとうございました！

「台湾留学と異文化理解」

経済学部 2 年 後藤正太

今回、私が台湾の短期留学プログラムに参加した目的は、「自分の知らない世界に触れ、視野を広げること」でした。きっかけとなったのは、高校 3 年生の春に訪れたイギリスでの経験です。異国の地で出会った文化や価値観に衝撃を受け、自分の中の「当たり前」が大きく揺さぶられました。それ以来、私は新しい環境に飛び込むことで、より広い視点を持ち、人生を豊かにしていきたいと考えるようになりました。
そのような思いの中で、私は台湾の留学プログラムを知り、異文化体験を通じて成長したいと考え、参加を決意しました。台湾を留学先に選んだ理由は、食文化の魅力、治安の良さ、そして日本と文化的に親しみやすい点に惹かれたからです。テレビなどを通じて、小籠包や魯肉飯をはじめとする多種多様な料理や、夜市を中心とした外食文化の発達を知り、強く興味を持ちました。また、かつての日本統治時代の影響が町並みに残っていることや、日本のアニメやマンガといったサブカルチャーが人気であることからも、文化的に親しみを感じました。海外経験が少ない私にとって、台湾は比較的ハードルの低い異文化体験の場であり、挑戦の第一歩として最適だと感じました。

台湾での生活は、食事や観光、現地の人々との交流を通じて非常に充実していました。街中ではバイクの利用率が非常に高く、歩道にずらりと並んだバイクの数に圧倒されました。さらに、台湾では食べ歩き文化が根付いており、授業中にドリンクを片手に受講する学生も珍しくありませんでした。学校周辺には手軽に利用できる飲食店が数多くあり、日常的に外食するスタイルが生活に自然に溶け込んでいることが新鮮でした。
特に印象に残った体験のひとつが、台北の故宮博物院を訪れたことです。中国の歴代王朝が所蔵していた美術品や文化財を、歴史的背景と結びつけながら鑑賞する中で、美術品の持つ奥深さや時代ごとの文化の重みを改めて実感しました。
また、台湾の学生との交流を通じて、言語を学ぶうえで最も効果的なのは「実際に使う機会を持つこと」だと強く感じました。トランプやバスケットボールなどのゲームを通して自然とコミュニケーションが生まれ、距離が縮まるのを実感しました。自分が話した中国語が相手に伝わったときは、本当に嬉しく、自信にもつながりました。
一方で、言語の壁に苦労した場面もありました。例えば、学内のレストランで一人、あるいは日本人の友人と注文しようとした際、バディに教えてもらった「我要一份〇〇」というフレーズがうまく伝わらず、店員さんに困った顔をされてしまいました。仕方なくスマートフォンで料理の写真を見せ、「This please」と英語で頼むしかなく、とても悔しい思いをしました。この体験を通じて、語彙や発音の大切さを痛感すると同時に、もっと語学を勉強しなければならないという思いが強まりました。

今回の留学を通じて、私は自分自身や日本社会についても多くの気づきを得ました。特に、台湾の学生たちは日本の学生よりも大人びているという印象を受けました。彼らは責任感が強く、自分の行動に対して明確な考えをもち、自分の意見をはっきりと主張します。これは、台湾では成人年齢が 18 歳であることや、若いうちか

ら社会的責任を担う環境にあることが影響しているのかもしれません。一方、日本では20歳まで「保護される」感覚があり、学生生活もどこか受け身な傾向があるように感じます。
また、日本の「同調圧力」の強さにも改めて気づかされました。台湾では、人々が自分の行動に自信を持ち、他人の目を過度に気にしない雰囲気がありました。それに対して日本では、「空気を読む」ことが重視され、多数派に合わせる傾向が強く見られます。この違いを肌で感じることで、日本の集団主義が必ずしも居心地の良いものではないという新たな視点を得ました。

この留学を通じて、私は「受け身ではなく、自分から行動することの大切さ」に気づきました。今後は、大学内の国際交流イベントや留学生支援活動に積極的に関わっていきたいと考えています。また、異文化に触れることで視野が広がり、多角的な思考力を身につけられることを実感したため、将来的には海外でのインターンシップや、アジア諸国と関わる仕事にも挑戦してみたいと思うようになりました。
さらに、住む場所を変えることで環境をリセットし、新たな人間関係を築きやすくなることも感じ、将来的に地元を離れて就職することも現実的な選択肢として視野に入れています。
この台湾での経験を糧に、今後も自分の殻を破りながら新しいことに挑戦し、視野を広げ続けていきたいと強く思っています。

現地学生・バディとの交流→

「SUSAP 東華大学プログラム成果報告書」

芸術地域デザイン学部３年　安東愛良

私が今回の SUSAP に参加した目的は、主に英語と中国語の語学力を向上させるためである。外国語を勉強することが趣味で、英語と中国語の両方を学習していた私にとって、その２つの言語を同時に学ぶことができる良い機会だと考え、東華大学プログラムへの参加を決意した。また、以前に一度台湾を訪れた経験があったことから、より長い滞在期間を通して、台湾がどのような国であるのかを肌で感じてみたい気持ちもあった。

実際の留学期間中には、英語と中国語の語学力を向上させるという目的を達成するために、英語や中国語、日本語の講義を受講するほか、自分の興味のある分野の中から、英語で開講されている授業を受講した。日本語の授業では、母国語を通じて中国語を学んだ。この授業は基本的にペアワークで行われ、隣の席の台湾人学生とお互いの言語を教え合いながら、授業に取り組んだ。中国語の授業では、基本的な発音から中国語を学ぶことができ、中国語を話すうえで発音を理解するのにとても役立った。また、簡単な会話文を習い、実用性の高いセンテンスを学ぶことができた。私はこの研修に参加する前に中国語を１年間独学で学んでいたが、現地の中国語を聞き取ることは難しかった。そこで、なんとか使える中国語を習得しようと、中国語の授業に加え、まずは注文の場面でよく使用するフレーズをバディに教えてもらった。バディに教えてもらうことで、よりリアルな中国語を知ることができた。さらに、できる限り中国語での注文に挑戦してみようと思い、自分が中国語で言える料理を頼むなどの工夫をした。最初の頃と変わらず、今でも中国語での注文は難しいと感じるが、お店の人から中国語で投げかけられた質問に対して、それを理解して中国語で対応することができたときはとても嬉しく思った。台湾人同士の会話や授業中の先生の言葉も、台湾に来たばかりの頃に比べると、聞き取れる部分が多くなり、中国語の成長を感じている。英語については、音楽や芸術に関する講義を英語で受けることで、リスニング能力を鍛えることができたと感じる。台湾の学生とは英語でコミュニケーションをとることが多かったため、台湾に行く前に比べると、英語で意思疎通を図ることに躊躇いがなくなったように思う。これからも語学力の向上に努め、継続して語学学習を続けていきたい。

週末には、バディが花蓮市内の様々なスポットを案内してくれ、おすすめの飲み物や食べ物を教えてくれた。さらに、台北や高雄を一緒に旅行し、とても充実した休日を過ごすことができた。また、台湾では行く先々で可愛い動物たちに出会うことができた。カフェやレストランをお店のペットが自由に歩き回ったり、野生の犬や猫、リス、ペットのミーヤキャット、ぶた、うさぎ、鳥などのエキゾチックアニマルを連れた人々がいたり、毎日たくさんの動物と出会い、とても癒やされた。

次に、今回の SUSAP 参加を通じて、自分の中の当たり前がひとつ覆された出来事について紹介する。台湾に行く前は、文化や価値観などにおける台湾と日本の違いはあまりないだろうと想像していたが、実際に１ヶ月以上もの時間を台湾で過ごしてみると、似ているように見えるけれども、そこに細かな違いがたくさんある

ことに気付き、両国の異なる文化や価値観を再認識することができた。私が特に台湾について理解を深めることができたきっかけは、台湾で聞く音楽に注目したときだ。台湾ではほとんどのお店で K-POP が流れており、たまに J-POP も流れている。あまりにも韓国の音楽を耳にするため、そのことをバディに尋ねてみたところ、台湾でもっとも人気のある音楽は K-POP だという答えが返ってきた。いくら K-POP が世界的に人気だとはいえ、どこの国であっても自国の音楽が当然のように一番消費されていると考えていた私は、それを聞いて非常に驚いた。はじめは、他国の音楽が大きな割合を占めていることについて少し違和感を覚えたが、台湾は独自の文化を豊富に保持したり発展させたりしている一方で、他国の文化も積極的に受け入れている国であると感じるようになった。

もう一つ驚いたことは、学年区分の違いである。台湾の人と交流する中で、生年月日が私とたった 2 日違いの学生がいたが、私が 3 年生であったのに対し、その人はもう 4 年生の後期を過ごしていた。学年の区切りが異なるために生じたこのような違いは、台湾で過ごしてみないと実感することができなかったと思うので、良い留学経験の一つだと感じた。

今回の SUSAP での研修を通して、自分の語学力を高めることができたとともに、さらに語学学習に対する意欲が高まった。また、食や生活の様子などを含めた台湾での当たり前に触れ、日本で暮らしていては知らなかったことを知ることができ、自分の考えを広めることができた。日本に帰ってからも、今回の留学経験を活か

し、異なるものを尊重する姿勢を忘れずに、様々なことを学び続けていきたい。

高雄

台北

「台湾研修を終えて」

教育学部３年　福永寧音

私がこの研修を志望した一番の理由は、日本とは異なる環境で生活する中で、異文化を肌で感じたいと考えたからでした。直接異文化に触れるという経験は、将来、教育現場で様々な国にルーツを持つ子供と接していく中で、異文化について理解し、子供との関係構築に繋がると考え、本研修への参加を決意しました。

私にとって海外に行くことは本研修が初めてであったため、渡航前は食事や環境、健康など、様々な面で多くの不安を抱えていました。しかし、いざ台湾で生活してみると、新鮮な毎日に多くの刺激を受ける 35 日間でした。

東華大学の授業を受けて、学生の主体性や積極性、教授と学生の関係性の近さを感じました。まず、どの授業においても、「学びたい」という強い気持ちと明確な目的をもって学びに来ている学生の姿に圧倒されました。教授の意見を取り入れるだけでなく、教授とは異なる意見であっても、しっかりと自分の意見を述べていたり、わからないことがあればその場で質問し、納得できるまで理解しようとしたりしている学生がほとんどでした。これらは、日本ではあまり見られない光景であり、自分の意見や考えを積極的に発信していくことの大切さについて考えさせられました。また、中国語の授業では、外国人留学生が多く受講しており、教授が、漢字で一人一人の中国語名を考えたり、それぞれの出身国の言語で解説プリントを配布したりしていて、個別に寄り添った指導をされていました。また、English learning and popular culture の授業では、教授が話すだけでなく、毎時間３人の学生がプレゼンを行い、学生が主体となりながら、教授も学生から学びを得ていると感じました。授業終わりには、教授が発表者一人一人に対して、内容や動作、態度などに関してプレゼンのフィードバックを行っていて、学生一人一人とのコミュニケーションを大切にされている姿が印象的でした。また、日本へ興味のある人の多さに驚きました。日本語Ｉの授業では、席数が足りないほど多くの学生が受講していて、教室がパンパンでした。その授業内で話した人たちはみんな、日本のアニメや歌など、日本に興味があり、授業内だけでなく、授業外でも自分なりに日本語を学んでいて、台湾では、自分の予想以上に日本が親しまれていることを感じることができました。また、この授業で知り合った人たちからの話を聞いて、外国の人から見た日本の魅力を知ることができ、日本についても考える良い機会となりました。

多くの外国人留学生が在籍する東華大学では、台湾人だけでなく、インドネシア人やマレーシア人、インド人など、多国籍の学生と関わる機会も多くあり、みんなが自国のことについて話してくれたり、写真や動画を見せてくれたりしたため、多様な文化に触れることができました。その際、自分も日本のことを話そうとしましたが、英語でうまく伝えられなかったり、浅い知識でしか話すことができなかったりしたため、まずは日本についてもっと知るべきだと強く感じました。また、バディ達と 10 人ほどの大人数で台北に行った際は、英語、中国語、日本語と３か国語でみんなで通訳し合いながら情報共有をしたり、それぞれが持っている知識で助け合ったりしながら過ごし、とても貴重な経験をすることができました。

私のバディは、中国語、英語に加え、日本語がとても堪能でした。日本への興味から、独学で日本語を勉強しているそうで、私が日本語を教えたり、バディから中国語を教えてもらったり、互いの言語や文化を教え合う良い関係を築くことができ、多言語を話す人たちから大きな刺激をもらいました。

台湾で過ごした 5 週間は、毎日が出会いにあふれていて、多国籍の人々と関わり、言葉が通じないからこそ、コミュニケーションは言葉だけでなく、笑顔で接することやジェスチャーを使うことなどの大切さを多くの場面で感じることができました。お店やレストランで、私たちが日本人だとわかると、「こんにちは、ありがとう」と知っている日本語を話してくれたり、日本へ行ったときの写真を見せてくれたり、フルーツをサービスしてくれたり、日本語のメニューを持ってきてくれたり、多くの人が外国人の私たちにとても親切にしてくれました。また、「謝謝」と中国語を伝えるだけで喜んでくれ、何か一つでもその国の言葉を知ることが、関係構築に繋がるのだと感じさせてくれました。

慣れない環境での生活は大変なこともありましたが、本当に多くの人たちに支えられ、計り知れないほどの経験をすることができました。研修を支えてくださった方々、研修中に出会った方々、本研修に関わってくださった全ての人に感謝申し上げます。

「台湾留学を振り返って」

農学部２年　大村美貴

私が国立東華大学の35日間のプログラムに参加した理由は、英語力の向上と異文化交流を通じた自己成長を目指していたからです。このプログラムに参加して、実践的な経験を積むことで自身の成長を実感することができました。また、新しい発見や素敵な出会いがたくさんあり、とても実りのある時間を過ごすことができました。人の温かさに触れることの多い１ヶ月だったと感じます。この貴重な体験は単なる語学学習にとどまらず、文化的な交流や人間関係の構築においても深い意味を持つものになりました。

私がこのプログラムに参加して得られた経験について英語力の向上と異文化交流をメインに紹介しようと思います。

まず、英語力の向上について、私は日本では英語を話す機会が少なかったので、スピーキング力に自信がありませんでした。台湾に着いた当初は緊張もあり、ほとんど英語を話すことができませんでした。また、台湾人の高いスピーキング力に圧倒され、自分の英語力の低さに恥ずかしさを感じることもありました。そのため、自分の思いをうまく伝えられなかったり、会話がうまくいかなかったりすると、相手に対して申し訳ない気持ちにもなりました。しかし、東華大学の学生たちは私の拙い英語でも真剣に耳を傾けてくれました。彼らが私の言いたいことを理解しようと努めてくれたことに、本当に感謝しています。また、彼らの積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が、折れかけていた私の心を支えてくれました。そのおかげで、挫けている場合ではないと感じ、もっと頑張って発言していこうという気持ちになりました。どうしたらもっと楽しく会話ができるか考え、ジェスチャーやアイコンタクトを意識するようにしました。最初の頃は、完璧な英語を話さなければならないと思い込んでいましたが、間違った英語でも気にせずに積極的に話す友達の姿を見て、私も未熟な英語力ながら積極的に発言する練習をしようと思えるようになりました。今回の異文化交流を通じて、英語力が高いことは重要ですが、コミュニケーションにおいて大切なのは相手に歩み寄る姿勢だと気づきました。最終的には、初めの頃よりも英語で発言することに対する抵抗がなくなり、さまざまなことを話して仲良くなりたいという気持ちが強くなりました。その結果、積極的に質問をし、楽しく会話を交わすことができるようになりました。スピーキング力向上の第一歩を踏み出すことができましたが、今後の課題として日本に帰ってからも引き続き力を入れて頑張りたいと思います。

次に異文化交流について、特に印象に残っているのはトランプゲームをして遊んだことです。ババ抜きや大富豪などの定番のゲームでも台湾と日本ではルールが異なっていて興味深かったです。日本のルールは台湾と比べて優しいと感じました。また、台湾の学生に「ダウト」というゲームを教えてもらい、ルールが複雑で理解するのに少し時間がかかりましたが、

とても盛り上がりました。この体験を通 して距離が縮まったように感じました。

休日には東華大学の学生たちに様々な場所に連れて行ってもらい、台湾の美味しい食べ物や美しい山、川、海、星空などを堪能しました。九份や台北にも訪れることができ、多くの素晴らしい体験をさせもらいました。花蓮市の自然は特に美しく、晴れた日の海はこれまで見た中で一番透き通っていました。夜空には美しい星々が輝き、圧倒的なスケールの自然の力に癒されて幸せな気持ちになりました。

台湾人のバディたちは非常に優しく、私たちのことをとても気にかけてくれました。日本語が上手なバディも多く積極的に話しかけてくれる人が多かったと感じます。アニメや j-pop、漫画に詳しく日本に対する興味を持って接してくれることが嬉しかったです。

全体を振り返ると、私は十分な準備ができていないまま出発の日を迎えてしまいました。初めての海外留学だったので不安が大きかったですが、国立東華大学の皆さんやルームメイトをはじめとする日本人学生の優しさのおかげで、日本に帰りたくないと思うほど充実した毎日を過ごすことができました。本当に素晴らしい思い出をありがとうございました。このプログラムを通じて出会った全ての方々に感謝の気持ちを述べたいです。これらの交流は日本に帰ってからも続けていきたいと思います。謝謝！

「留学を通しての変化 」

医学部 1 年　田中志歩

私は今回の台湾留学に参加するにあたって、2 つの目標を持っていました。1 つ目に自分と異なる価値観を持った人々との交流やコミュニケーションを通して常識と考えている部分を改め、視野を広げることです。そして 2 つ目は、英語でのコミュニケーションスキルの向上です。これらの目標に沿って、それぞれの目標に対する達成度や留学を通しての自分自身の変化、学びをまとめていきたいと思います。

台湾に行った初日、東華大学に着いた時にはそれぞれのバディーが寮の目の前まで迎えに来てくれたことを今でも鮮明に覚えています。初めて自分のバディーと話したときに緊張しすぎて、まともに英語での会話もできなかったです。それでも一生懸命聞きとろうとしてくれて、私のバディーは日本語も少し話すことができるので親身になってサポートしてくれました。台湾の学生は日本に興味のある人が多く、独学で日本語を学び、分からないことは私にたくさん質問してくれて熱心な学生が多かった印象でした。また、台湾は基本的に外食文化で朝からガッツリ朝食を食べに行くことに非常に驚きました。1 人暮らしの賃貸にはキッチンがないことが多く、自炊するよりも屋台や飲食店で食べたほうが安いとバディーから教えてもらいました。私も 35 日間台湾で生活していて食費が日本よりもすごく安かったです。1 日 3 食外食で食べても、200 元～300 元(1000 円～1300 円）以内に収まりました。毎日自分のバディーや友達のバディーとご飯を食べに行って、台湾の美味しいローカルフードをたくさん食べました。私の好きだった台湾フードは鶏肉飯(ジーローファン)、蛋餅(ダンピン)です。鶏肉飯は鶏の胸肉やモモ肉がのったご飯に揚げエシャレット入りの特製のタレをかけた、わかりやすく言えば「鶏肉丼」です。初めて連れて行ってもらって食べたときにその美味しさに感動して何回も連れて行ってもらいました。蛋餅は甘くないクレープ生地で、卵やねぎなどの具材を包んでいる台湾風クレープ卵焼きのことです。台湾を代表する朝食で、クレープ生地のもちもちとした食感と、卵のふわふわ感が絶妙にマッチして本当に美味しいです。台湾に来る前は 35 日間日本食なしで耐えることができるのか不安でしたが、台湾のご飯は日本と少し似ているところもあり、何も心配することがないくらいどれも美味しく楽しく食事をしました。衛生面は台湾ではトイレットペーパーを流せない場所が多く隣のごみ箱に捨てるのが普通で、最初は困惑する場面も多かったが 1 か月も生活すると慣れてきた。また、台湾は日本よりもゴミの分別が厳しく見習うべき点だなと考えました。台湾の学生から「たった 1 か月しか台湾にいないんだから思いっきり充実させよう！」と言われ毎週末海や川に行ってキャンプをしたり、川遊びをしたり、バディー達と日本人学生の総勢 19 人で台

北・九份に行ったこともすごく思い出に残っている。事前に旅行の計画やホテル・電車の予約すべてバディー達が行ってくれて本当に感謝しかなかったです。そのおかげで、一生思い出に残る旅になりました。東華大学での授業で１番楽しかった授業は日本語の授業です。授業で隣になった台湾人はみな日本のことが好きで、好きな日本の音楽や映画、ドラマ、アニメの話で盛り上がりました。日本の映画も海外の人からこんなにも愛されていることに驚きの連続でした。毎回の授業で違う台湾の学生と隣に座って授業を受けて、いろいろな学生と話すことができました。ある時隣に座った台湾の学生は初めて日本人と話すので最初すごく緊張していたが、どんどん会話が弾むようになり仲良くなることができたのもいい思い出になっています。傾聴の姿勢で、目を合わせながら話すことや、相槌、顔の表情などを意識することで、言語の壁があったとしても相手も話しやすくより深いコミュニケーションをとることができるということに非常に気づかされました。今まで日本以外から出たことのない自分にとって日々日常の当たり前からは異なることに触れ、生まれも育った場所も違う台湾人以外にもいろいろな学生とのコミュニケーションを通して視野が大きく広がった。このような変化も踏まえて、１つ目の目標も達成されたと思います。将来看護師、助産師として働く際に様々な視野や価値観を持って患者さんとコミュニケーションや信頼関係を気づくことに役立てたいと強く思います。

次に英語でのコミュニケーションスキルの向上についてですが、達成できた部分と達成できなかった部分のどちらもあると思います。高校を卒業し大学で専門科目を勉強することが増えた今、英語に触れる機会が非常に少なくなったと自分自身すごく感じていました。 そのため私は英語での授業を主に、「English Reading and Writing」、「British Language Culture」、「English Communication」、「Psychology など 3～4 人の生徒同士のグループディスカッションが多いものを履修しました。どの授業でも初めは英語の授業についていくのに必死で、他の学生とコミュニケーションをとることもままならなかった。しかし、同じグループになってくれた学生はみな優しく私が日本人で慣れていない環境ということも分かってくれ、たくさんサポートしてくれた。最後の授業の時にはグループの人たちが自分の国のお土産やお菓子をくれて別れが本当に惜しかったです。日々日本語しか使っていないので最初は英語を話すことをためらいを持っており、少し勇気が必要でした。英語でしか他の人とコミュニケーションをとることができない環境に身を置くと頑張って話したいという思いから英語を使う場面が増えるようになりました。そのおかげで授業で日本人ではない他の国の沢山の人たちと友達になることができ自分のコミュニケーションスキルが挙がったことが嬉しく、自信に繋がりました。この 35 日間、自分の中でも英語で頑張って会話しようという思いが強くなり非常に貴重な経験でした。授業では先生が主体的に進めるというよりも生徒が主体的になって意見を出したり、プレゼンテーションを行ったり日本の授業とは異なるスタイルで刺激的な時間になりました。また、英語の他にも自分で日本語を学ぼうとする台湾の学生の姿勢に感化されて私も中国語を学ぶ機会がたくさんありました。バディーや仲良くなった台湾の学生が中国語の授業を行ってくれてそこで

初めて中国語の成り立ちや発音の仕方、日本でいうと 50 音の発音を 1 から学ぶことができました。

　これらの他にも 35 日間の留学を通して将来に繋がる様々なことを学ぶことができました。得た学びと思い出を大切に胸にしまってこれからの日々も精進していきたいです。最後になりますが、佐賀大学の先生方、東華大学の先生方とバディー、沢山の思い出を作ってくれた台湾の学生、そして両親の沢山のサポートのおかげで、貴重な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

「留学を通じて経験したもの」

農学部１年　土井和奏

私が SUSAP 台湾研修に参加した目的は、自分の英語力を把握し、さらに英語を学ぶモチベーションを高めたいと考えたからです。加えて、台湾の食と授業についてとても興味を持っていたからです。以前、中国に行き日本語専攻の中国人と話をしたときに、流暢に日本語を話しており、日本語の上手さに驚きました。その人は、留学もせず、授業だけで学習したと言っていたので、中国の授業（指導法）をぜひ知りたいと思ったからです。今回 SUSAP を通して、伝えたいことが３点あります。

１つ目は、台湾と中国の違いです。今回の研修では、１週間に 20 単位以上を取得すればよいので、空き時間や週末には観光をする時間が多くありました。そこで気づいたことの一つは、私は以前中国に行ったとき、いたるところに監視カメラがあったことです。これは非常に印象に残っていました。対照的に台湾では、電車の中にのみ監視カメラがあり、他の道路や建物にはそこまでたくさんのカメラがなかったので、これも中国と台湾の違いだと感じました。さらに中国では、ホテルの Wi-Fi に接続すると Line、YouTube、Instagram、Google などが利用できないような設定になっていました。が、台湾では大学の Wi-Fi に接続しても、これらのアプリを自由に使用することができました。この経験から、中国は権力集中で、台湾は地方分権であることを強く実感しました。しかし、中国人も台湾人も私たちが困っていたときに親切にすぐ助けてくれました。そのため、「中国人だから」といって偏見を持ったり差別をすることは絶対にしてはいけないと強く思いました。

２つ目は、日本との違いについてです。大学はとても広く、ファミリーマートがいくつかありました。そこにはイートインスペースがあり、おにぎりやパンを買うとジュースが安く買えるセットもありました。また、信号機にはカウントダウンがあり、何秒待てばよいか分かるのでとても便利でした。私のバディーのバイクの持ち手にはスマホ置きがあり、信号に捕まったら秒数を見てスマホで道を検索したりしていました。そして一番驚いたのは、台湾は外食社会だということです。私たちのバディーに話を聞くと、一人暮らしをしていても家では料理をあまりせず、学食やコンビニ、学校近くのレストラン、夜市で多く食べるとのことでした。確かに、台湾の学校の近くにはレストランが多く立ち並んでいたり、夜市が 2、3 個あったりしたので、「外食社会だからか～」と納得しました。

３つ目は、滞在中の学びと経験です。今回の研修では、各自がシラバスを見て興味を持った授業を選び、受講しました。私は主に英語の授業を受講しました。そのなかで一番印象に残っている授業は、自分の好きな曲について英語でプレゼンをするものでした。初めて、台湾人のプレゼンを受けたときに、なぜかとても感動しました。その理由は、パワーポイントに様々な工夫が施されていることに気づいたからです。例えば、文字の形や色に変化を与えたり、ボックスデザインを使用していました。また、感情（Yeah, Yes, Oh my）を表現したり、ジェスチャーを使うなど緊張してない様子でプレゼンをしていました。この経験を通して、私は英語でのスピーチやプレゼンテーションの際に、発音、デザイン、ジェスチャーを意識するこ

との重要性を強く感じました。これからの学びにおいても、このポイントを意識していきたいと思います。

1週間目は、バディーと打ち解けるために、いろいろな話題を浅く広く取り上げてもらいながら、英語を使って会話をしました。そのときは、自分から話せなかったが、２週間目、３週間目と長く接することで、外国に溶け込むことができ、英語力、コミュニケーション力が成長した気がします。この経験は、今後ぜったいに生きてくると思うので、この体験を活かし将来に向けて頑張りたいと思いました。

「35 日間の台湾研修を終えて」

理工学部 2 年　福岡愛子

この春、私は初めての海外で台湾の東華大学に 35 日間の短期留学をし、忘れられない経験を得ることができました。

平日は大学の授業を受け、休日はバディとお出かけをし、この滞在期間は非常に充実していました。

大学の授業は主に英語で開講されている授業、日本語、基礎中国語の授業を取りました。その中でも特に印象に残っている授業は「English learning and popular culture」と「日本語」の授業です。「English learning and popular culture」は毎週学生が 3 人ずつ洋楽を紹介し、それについて英語でプレゼンをするという内容でした。私もプレゼンをしたことはありますが、このクラスを受けている学生の英語能力の高さとプレゼンスキルの高さにとても驚かされました。10 分以上のプレゼンでほとんどカンペを見ずに、抑揚やジェスチャーを交えながら話しており、自分が伝えたいことを母国語で話すのと同じ熱量で伝えることができる人がこんなにも多くいるのかと台湾の英語教育のレベルの高さに感心しました。また「日本語」の授業では、毎回台湾の学生とペアで座り、授業で出てきた日本語の例文を私たちは中国語で教えてもらいお互い言語交換をしました。台湾に来てからは基本現地の人との会話は英語でしたが、この授業では逆に私が“母語話者”として、台湾人学生に日本語を教えたり、質問に答えたり、日本の習慣について説明したりしました。日本に住んでいると、日本語を教える授業を見ることはないので、海外の人にどのように日本語教えているのかを知ることができとても興味深かったです。

授業のない休日はバディと花蓮や宜蘭、台北などを訪れ、台湾の文化や自然を満喫しました。花蓮ではバディにおすすめしてもらったホエールウォッチングに行きました。天候が悪く揺れる船で太平洋の海に出て、実際にイルカを見ることができたのは日本では経験できない貴重な時間でした。

花蓮の夜市では「葱油餅」や「蚵仔煎」「臭豆腐」など、台湾ならではの食文化を堪能しました。言葉が拙いながらも、現地の人々とのやり取りを通じて温かいおもてなしの心を肌で感じることができたのも印象的です。

また 2 泊 3 日でバディと台北旅行にも行きました。みんなで 3 日間の「台北無限周遊パス」を購入し、迪化街や十分、九分、西門町、台北 101 など本当にたくさんの観光地を訪れました。最終日にみんなで小籠包の名店「鼎泰豊」で食事をしたのも思い出です。世界各国に店舗を展開しており、日本にもある料理店なので今度日本と比較してみたいです。

振り返ってみると、この 35 日間は授

業だけでなく、現地の学生とのコミュニケーションや週末の旅行を通じて、語学力だけでなく異文化理解の視野を広げる良い機会となりました。台湾は日本から地理的に近い国ですが、言語や生活習慣、食文化などにはやはり違いがあり、最初は戸惑うこともありました。しかし、現地の人々の優しさや、バディをはじめとする大学側のサポートのおかげで、短期間ながらも充実した留学生活を送ることができました。

この経験を通じて学んだことは大きく分けて２つあります。１つ目は、「言葉は使うほど上達する」という当たり前のようでいて、実践するのが難しいことです。知っている単語や授業で習ったフレーズを現地で試してみることで、単語や文法がどのように通じるのかを肌で感じることができました。２つ目は、「異文化交流の楽しさと大切さ」です。日本と台湾は似ている部分もありますが、異なる部分も多々あります。違いを理解し合い、お互いの良さを認め合うことで、新しい視点や価値観を得ることができました。留学先で築いた友情や思い出は一生の財産になると感じています。

最後に、東華大学での 35 日間の短期留学は、私の人生において非常に意義深い時間となりました。今後は、ここで培った語学力と国際的な視野を活かし、さらに勉強を深めるとともに、台湾との交流の機会も増やしていきたいと思います。短い期間とはいえ、学びと出会いに満ちた充実の留学生活を送ることができたことに心から感謝し、この経験を糧に自分自身の成長へとつなげていきたいです。

「台湾での自身の成長」

農学部１年　豊福愛梨

私は今回の研修を通して、自分自身の変化が多くあったのでそのことについてと、印象的だった台湾での経験について報告したいと思います。まずは自分自身の変化からお話ししたいと思います。一つ目は自分の英語のスピーキング能力が向上したことです。私は今まで海外に行ったことがなく、ネイティブの人とコミュニケーションをとる機会がないのはもちろん、普段の大学生活でも英語なんて授業でしか使ってきませんでした。台湾に来てからも、もちろん日本語は使えないので、共通の言語である英語を使ってコミュニケーションをとらなければならず、最初の数日間は自身のスピーキング能力の低さに焦りを感じていました。特に、飲食店やコンビニエンスストアなどで店員さんとコミュニケーションをとることは私にとってとても難しかったです。ここは台湾なので一番ポピュラーな言語は中国語です。現地の学生が一緒についてきてくれるときは、私の代わりにすべて話してくれていましたが、私一人の時や日本人のみの時は、思ったように意思が伝わらず、困ることも多々ありました。けれど私は、英語に関してリーディングやライティング、リスニングに力を入れて取り組んできたので、その能力を駆使して、なんとか意思を伝えようと毎日奮闘しているうちに、基本的な会話くらいはできるようになっていきました。そうすると、最初は気後れしていた英語でのコミュニケーションも段々と楽しく感じるようになっていき、自分のスピーキング能力の向上を実感しました。時には翻訳機を使ったりして、バディとのコミュニケーションをとっていましたが、翻訳機に頼ることで、自分が今言いたいことをどのように伝えればいいのか明確になり、それはそれで勉強になりました。自分の伝えたいことが相手に伝わったときの嬉しさは、自分のスピーキング能力の向上も私に感じさせました。これらのことから私は、英語のスピーキング能力向上のためには何度もトライアンドエラー、つまり何度も挑戦して失敗を繰り返すしかないと感じました。自分の言いたいことが伝わるまでコミュニケーションを諦めないこと、それは自身の能力向上につながるだけでなく、相手と良い関係を築くためにも必須の事なのではないかと思います。実際私が、気持ちや言いたいことを考えたり、なんとか伝えようと奮闘したりしていると、相手も一緒に理解しようとしてくれ、私もなんだかうれしい気持ちになったのを覚えています。二つ目に、自分自身の変化として積極性の変化を挙げたいと思います。私が台湾にきて驚いたことの一つに、国立東華大学の生徒の積極性の高さがあります。私は佐賀大学で授業を受けていて、先生が生徒にみんなの前で発言することを求めた時、ほとんど

の生徒が手を挙げず、じっと黙っているだけという状況に何度も遭遇しました。そういう時私は先生に申し訳なさを感じると同時に、手を挙げたいけれど目立ちたくないというジレンマも感じていました。私は皆の前で発言をすることに対して、恥ずかしさや不安を感じてしまうので、それらの生徒と同じようにいつも黙ってやり過ごしていました。しかし、この大学の生徒たちは先生の問いかけに対して積極的に発言をし、まったく恥ずかしさなど感じさせていませんでした。私はこのことに対してとても驚きを感じました。一人一人が自分の意見を持っていて、それを堂々と伝える姿がとても印象的でした。それと同時にうらやましさを感じ、自分も彼らと同じように発言してみたいと思うようになりました。今までの自分からは考えられない気持ちになり、自分でも変化を自覚し、それから授業でも何度か自分で発言をすることができました。なぜこんなことができるようになったのか考えてみると、周りの環境が一番影響しているなと感じました。よくも悪くも私は流されやすい性格なので、よい環境に身を置いたことで自分の積極性が向上したのではないかと思います。逆に、留学から帰ってきてまた佐賀大学で発言を求められたとき、そこで手を挙げられるかどうかが、自分が本当に変われるチャンスだなと思っています。この留学生活を通して、いろんな人と知り合い、いろんな考え方に出会いました。その中で友達もでき、自分がこんなにもたくさんの友達を海外で作れるとは思ってもいなかったので本当にうれしく思います。今回の留学を通して私は様々な面で大きく成長できたと感じています。様々な人と触れ合い、いろんな文化を体験して自身の視野が広がったように思います。これからこの経験がどのように役に立つのかまだわかりませんが、留学に行かなければ見られなかった世界があり、それを知った今、私自身が前の自分と大きく異なっていることは確かです。最後に、本当に親切にしてくれた現地の学生や人々に感謝を述べて終わりにしたいと思います。

「SUSAP 国立東華大学短期留学成果報告書」

農学部１年　豊福円香

今回の国立東華大学での短期留学は私の20年間の人生の中で最も楽しい時間であり、本当に有意義な時間だったと感じています。初めての海外、初めての留学、初めての寮生活。初めてのことだらけで迎えた留学生活。不安や期待とともに私はこの一か月間を通して、自分の世界が広がるような、本当にたくさんのことを学びました。

国立東華大学での授業は、私にとって本当に興味深いと感じるものがとても多かったです。特に日本語、中国語、心理学の３つは周りの学生との距離が近く積極的にコミュニケーションの取れる授業であり、英語を実際に使ったり様々な人と交流できたりするという点でとても面白いと感じました。私は日本にいる際、自分の受けたい科目に日本語を含めるつもりはありませんでしたが、台湾人の生徒と多く交流ができると聞き履修することにしました。授業は、日本人が台湾人とペアになり彼らとともにコミュニケーションをとったり彼らに日本語を教えたりしながら受けることができ、彼らは先生が何を言っているのか教えてくれたり、逆に日本語で分からないところがあれば質問をしてくれたりと、本当にフレンドリーで一緒にいてとても楽しかったです。また心理学ではグループを作って活動する時間が多く、英語で開講されている授業であることもあり、台湾人だけでなく様々な国の生徒と交流をすることができました。その中で特に私が感心したことが彼らの授業に対する積極的な姿勢です。授業では人間の心理に関する様々なトピックを英語で学びますが、その中で先生が質問を投げかける場面では皆が積極的に挙手をし、たとえ自分の意見に自信がなくても自分の主張をしっかりと伝えられていることに本当に感銘を受けました。私は、日本にいる時は多くの人がいる場面で積極的に発言をすることが苦手で、周りの目線や自分の意見に対する人の評価が気になってなかなか一歩踏み出せていなかったからです。台湾に比べて日本では私と同じような考えの人の方が多く、授業の発表の時間に誰も発言せず、少しだけ居心地の悪いような思いがしたこともあります。私も彼らのような失敗や人の目を恐れない考え方を持ちたいなと思いました。そして、この一か月間でその考え方が少しだけ身についたのではないかなと思っています。

また、台湾の友人たちやルームメイトとたくさんの場所に訪れました。台湾には夜市という、日本でいうところの祭りのようなものが毎日か一週間に一度開催されており、私はさまざまな場所の夜市に数えきれないほど行きました。夜市では台湾らしい食べ物がたくさん売られていていつもどれにしようか迷うほどでしたが、そのなかでも特に私が好きだったのはさつまいもボールです。これは台湾の国民的おやつで、カラフルな色の丸いドーナツのような食べ物で、外側のさっくりとした触感と内側のもちもちとした触感が癖になる食べ物です。私は夜市に行くたびにこのさつまいもボールを探して、買っていました。台湾の食べ物は基本的にどれも日本よりも安く、気軽に買って食べられるため、彼らがほとんど自炊をしないというのは本当でした。日本ではほとんど毎日自炊をしているので食文化においても日本との違いを感じました。

ほかにも、台北や九分などの有名な観光地に電車で訪れました。台北では日本の渋谷のように人が多い街を歩き、様々なお店でショッピングをしました。私たちが入ったお店には、毎回といっていいほどどこかしこに日本語があり台湾に日本の文化や技術が浸透しているのを肌で感じることができました。九分では千と千尋の神隠しというジブリ映画のモデルになった場所を実際に目で見ることができ、普段の日常とは違う、非日常感を楽しむことができました。

私は今回の台湾への短期留学で、様々な文化や言語に触れて自分自身が成長できたと思えるところがたくさんあります。そのうちの一つは多様性を受け入れる力です。私は今まで海外に行ったことがありませんでした。当然日本以外の文化を肌で感じることはなく、やったことといえばスマホの画面から情報として受け取るだけのことしかしていません。ただ見ているだけならある程度受け入れることは容易でしょう。しかし、今回実際に肌で触れてみて、日本とは違う食文化、言語、社会などに初めは驚きや多少居心地の悪さを感じることもありました。ただ、実際に生活していくうちにその気持ちがだんだんと薄れていき、受け入れられるようになったのです。それは、彼らがただ私たちとは全く違う人、ではなく私たちと同じように言語や文化は違っても、同じ気持ちを共有できる一人の人であり、時には一緒に笑いあったりできる友人にすらなりえる存在だということを知ったからです。それは実際に行って彼らと話してみないと分からないことで、ただ日本にいて画面上で見るだけでは知りえないことです。私はこのことを学べたことがこの留学を行ったうえでとても大きな財産になったなと思っています。

最後に、この台湾留学で私は様々なことを学び、感じ、考えることができました。これらのことは私を支えてくれた台湾のバディたち、留学をサポートしてくれた先生方、一緒に過ごしてくれた日本人学生の仲間、留学を許可してサポートしてくれた両親。さまざまな人々のおかげで経験できたことです。台湾から帰る前に、そして日本に帰った後、彼らに最大限の感謝を伝えたいと思います。この経験は私の一生の財産となりよりどころになるでしょう。これらの経験がこれからの私につながることを祈って、この報告書を終わりにしたいと思います。

「台湾研修を終えて 」

経済学部１年　檜室圭輝

私が今回参加したのは約 5 週間、台湾花蓮市の国立東華大学での研修である。５週間では足りない、もっとこの場所で学び、過ごしたいと思うほど充実した期間を過ごすことが出来た。私がこのプログラムに参加した理由は、自分の英語力を試してみようと思ったことと、自分の生まれ育った国から離れて海外体験を積んでみたかったからだ。ほかのプログラムもあった中で台湾を選んだ理由は、台湾は様々な映画の舞台になっているためもともと行きたいと思っていた、そして日本と同じ島国であるため文化面においてどんな違いがあるのか興味を持っていたからだ。国立東華大学に到着したのは２０時頃だったが私たちのバディが出迎えてくれて、寮の場所に案内してもらい、必要なものの買い出しに連れて行ってもらった後、一緒にご飯を食べに行った。始めていったご飯屋さんメニューに英語表記がなかったため、バディの方々から英語での説明を受けながら注文をした。初日はとても緊張していたが、一週間もしないうちに慣れていくことが出来た。また、生活の中で苦労したことは、トイレを流せないということもあるが、とにかく寝るところに虫が多く、たくさん刺されてしまっていたことだ。幸いかゆみを止める薬や、虫よけスプレーを持ってきていた為良かったが、それでも完全に防ぐことが出来なかった。平日はほとんど毎日授業があり、私がとった授業のほとんどは、ディスカッションや生徒によるプレゼンテーションが行われていた。また、中国語を学べる授業を履修することができ、基本的な発音や基本的なフレーズについて学ぶことが出来た。また一つの授業が６０分間の 2, 3 コマ連続でつながっているというのも日本とは異なっているところだとも思った。また、キャンパスがとても広いため、自転車を利用しなければ少しきついと感じた。授業が終わった後の午後や、休日にはバディ達がさまざまな場所に連れて行ってくれた。花蓮市には東大門夜市というナイトマーケットがあったため、私はそこによく連れて行ってもらった。豆花を注文する際にバディの方々から中国語で教えてもらい、自分で注文することが出来た。店の店員さんも優しく見守っていただいて、台湾の方の優しさを感じた。中国語を単語や、フレーズだけではあるが覚えることが出来、覚えた単語を使うと現地の方はとてもうれしそうに反応してくれた。日本でも、外国からきた方が日本語をしゃべることをできたら同じ反応をするだろう。それは言語を学ぶということはその文化に対する一つのリスペクトではないかと考える。この五週間の間で、様々な経験や、日本人だけでなく台湾の方や、それ以外の国の友達を得ることが出来た。留学や、旅行などで再び訪れたいと思うほどかけがえのない思い出になった。

「SUSAP 台湾研修を終えて」

教育学部１年　阿部好花

留学前の自分と今の自分は別人である、と私は胸を張って言える。

国立東華大学で３５日間を過ごす中で、現地の学生、教授、留学生、さらには一緒にプログラムに参加したメンバーなどから数えきれないほど刺激を得た。

私は教育学部の英語科に所属している一年生で、英語が大好きなため、英語を学ぶというのが大きな目的で留学をした。ではなぜ、英語圏で留学しないのか？と疑問に思う人がいてもおかしくないだろう。それは、大学一年の前期と後期で出会った、様々な国からきた留学生と話した経験からだ。話している中で、英語が非母国語の国の人々のアクセントで聞き取れないことが多く、同じ言語を話しているのに意思疎通ができず､悔しい経験をした。これを克服するためにあえて英語が非母国語の台湾で留学をしようと思った。もちろん、留学してからも、アクセントの壁は大きかった。印象的だったのは、バディや現地学生と話す中で、ずっと“ｘ”（エックス）のように聞こえる単語があった。聞き直しても、同じ発音なので、初めはスラングか？”text”を早く言っているのか？とも考えた。しかし､4 日ほど経った日に、レストランで分からないことがあって、店員さんに聞こうとした時に”we will x her”と言っているのを聞いて､初めてそこで”ask”のことだと分かった。台湾の人にとって、ask は非常に発音しづらい単語だそうで、現地の仲良くしてくれていた学生だけでなく、受けていた授業の教授も発音しづらそうにしていて、驚いた。日本でいうＬとＲの発音のようなものだろうか。それに気づいた時、私は何も言わなかった。Ask！ Ａの音！などとは言わない。それは、アクセントは尊重されるべきだと考えるからだ。私が他の国の人のアクセントに違和感を多少なりとも覚えるのと同じように、私のアクセントも自分が気づかない内にでていて、それが相手にとって聞き取りづらいと感じる時も沢山あるだろう。しかし、誰からも自分のアクセントを直そうとされたことがない。つまり、アクセント自体はコミュニケーションにおいて全く問題ない。聞き取りできれば、意味が通じれば、それ以上に求めるものはないと思う。日本では、世界的に見ても英語が話せる、のレベルが高かったり、発音に非常に重きを置いて教育したりすることが多い。しかし、実際に様々な国の人が一つの「英語」という言語を使って話す環境に身を置くことで、話して会話ができることが一番大切で、逆にそれ以外に求める事はないことを改めて認識できた。完璧を求めようとしすぎる日本の文化から一旦離れることで、深く考え、自分の英語に対する考え方をしっかりと固めることができた。

また、他にも日本にずっといるだけでは得られなかった発見があった。それは、「年齢を気にしない文化」である。日本では、「年齢」が昔から非常に重視されているように感じる。（儒教の影響が大きいと思う。）そのため、敬語があり、一歳でも上であれば基本敬語を使うのが当たり前である。これは日本の大切な文化の一つだと思う。しかし一方で、英語や中国語には敬語というものはない。厳密にいうと、相手を敬う時に少し語尾を丁寧にしたり、can を could にするなどして距離を表すことはあるが、日本のように動詞から接し方からガラリと変わるようなものではない。私はこの「敬語」のない英語や、中

国語を話す環境に一ヶ月いて大きく考え方が変わった。

私は英語で開講されている専門の授業を取っていたが、それらは全て大学院生用の授業で私より年上の人しかいなかった。中にはすでに 20 年以上教師経験がある人もいた。初めは少し戸惑って、自分から同学年の友達のように関わって良いのか考えていた。しかし、彼らは温かく私を迎え入れてくれて、休み時間もずっと話しかけてくれたり、ご飯に誘ってくれたり、休日お出かけに誘ってくれたり、年齢関係なく友達としてずっと接してくれた。私はそれが凄く嬉しかった。相手からも自分から何歳というまで聞かれず、逆に自分から質問するまで、相手言い出すこともなかった。そこで、どれだけ自分が年齢に固執していたかに気付かされた。年齢はただその人が生きた年数で、その生きた年数はその人の今の考え方や言動になって現れる。年上だから絶対敬わないといけないのではない。人の中身にこそ、これまでに得た経験や知識が詰まっていて、そこに尊敬を感じられるかどうかの方が、もっと相手のことを一人の人間として対等に見られると思った。この考え方は日本でもずっと続けていきたいと思った。これから困っている周りの人がいたら、この考え方を共有したいし、将来教員になった時も子供たちに教えたいと思える考え方に出会うことができ、かけがえのない経験となった。

最後にこの SUSAP 研修に参加して、同じアジアの近くの国なのに、文化や考え方がこんなにも違うことに気づくことができた。また、冒頭にも述べたように、私はこの一ヶ月で様々なことを経験し、留学前の自分より強くなり、別の自分になれたように感じている。一ヶ月海外で過ごすという事は一人だけではなかなかできる経験ではなく、参加して良かったと心から思っている。これからも今の自分に満足せずに新しいことを学んで、自分を成長させていこうと思う。

「台湾研修を終えて」

芸術地域デザイン学部２年　永松七海

台湾で過ごして、特に驚いたことや気がついたことについて述べる。

まずは、台湾人の国民性についてだ。研修の中で、台湾人は親切な人が多く、世話焼きな人が多い印象を受けた。例えば、授業でたまたま隣の席に座っただけであるにも関わらず、その次の授業でケーキやタピオカミルクティ、手作りのお菓子などをプレゼントとして持ってきてくれたり、おすすめの食べ物や、観光地を紹介してくれたりした。それだけでなく、台湾人の友達を連れてきて、一緒に遊んでくれたりもした。台湾人のフレンドリーな性格には、いつも驚きと嬉しさを感じた。

次に、台湾の言語についてだ。台湾には「ボポモフォ」という独自の文字があり、台湾人のキーボードにはその文字が使用されていた。この文字は発音を表したものであるため、この文字と発音を覚えることで、言葉を正確に発音することができる。ゆえに、中国語を話す上で、非常に便利な文字だと思った。

そして、日本との生活スタイルの違いにも衝撃を感じた。食事に関しては、自炊をほとんどしないことや、大学内にある学食の種類の豊富さ、コンビニの多さに大きな驚きを感じた。また、大学を出てすぐに商店街があり、そこでは朝食や昼食、軽食、夕食を食べることができた。特に、大学内外問わずお茶の専門店があり、氷の量と砂糖の量を選択できるという点には、台湾ならではの面白さを感じた。また、食事の注文に関しては、メニューに印を入れてカウンターに持って行くことで注文ができるというスタイルに斬新さを感じた。もちろん、日本のように口頭で注文するという場所もあった。その場合は注文を中国語や英語でする必要があったため、初めは緊張したが、すぐにスムーズな注文ができるようになり、語学力の成長を感じた。そして、台湾にはお祭りでなくても夜に屋台が出る「夜市」というものがあり、日本との違いを感じた。東華大学の中にも定期的に夜市が開催されており、本当に楽しかった。ここで私は臭豆腐やさつまいもボールなど、さまざまな食べ物に挑戦をした。私は臭豆腐を美味しいとは思えなかったが、とても良い経験になった。

また、台湾では LGBT へのサポートが充実しているという点でもかなり大きな衝撃を受けた。私は全く知らなかったのだが、台湾はアジアで初めて同性婚を認めた国だそうだ。実際に生活をしていて、私のバディの友人がトランスジェンダーであったことや、交際や恋愛がオープンであるという国民性から、ある意味納得のできる話であると思った。

この研修で特に思い出に残ったエピソードとしては、休日にバディと行った旅行が挙げられる。私はこの 1 ヶ月で、台北、花蓮、台南、台中の 4 つの都市に行った。この旅行の中で、台湾の美術館を複数訪れたのだが、日本とのクオリティの差を感じた。今まで見たことがない展示の方法だけでなく、展示物の内容も興味深いものが非常に多く、学芸員資格の取得を希望している私にとって、非常に勉強になった。また、食事に関して、4 つの都市では同じ料理でも味付けが全然違うように思った。私は、4 つの都市の葱油餅の食べ比べをしたのだが、味付けや具材、サイズにも違いがあった。また、バディから

は台南はすごく甘い食べ物が多いと聞いていたが、私は台中のご飯も甘いと感じた。個人的には、花蓮の食事が日本人に一番合っているのではないかと思う。また、台南に行った際には、気温の高さに驚いた。花蓮や台北は日本とそこまで気候が変わらないと感じたのだが、台南に行くと明らかに日本よりも気温が高く、本当に驚いた。今後は、授業の中で知り合った台湾の友人らの出身地である、高雄や宜蘭に行ってみたいと考えている。

最後に、多くの時間を過ごした東華大学について述べる。最初に驚いたことは、佐賀大学とは比べ物にならないほどのキャンパスの敷地の広大さや、自然の豊かさである。また、バイクの多さにも驚いた。東華大学生の多くはバイクを持っていて、交通手段としては、バイクを利用することが多いようだった。大学内にはバイクの運転を練習する場所があり、面白いなと思った。しかし、バイクの多さは、東華大学周辺だけでなく、台湾のどこに行っても感じられた。また、日本に行ったことのある台湾の友人は、日本はバイクが少ないと言っていたため、互いにカルチャーショックを受けるポイントであるように思う。また、東華大学内には、本当に多くの国籍の人が集まっているように思った。授業の中ではたくさんの国籍の人と交流することができ、とても良い経験になった。また、私は日本語の授業を受講したのだが、日本に興味がある台湾人が多いことに衝撃を受けた。おそらく日本人の多くは台湾で日本が人気であることを知らないだろう。しかし、実際は多くの台湾人が日本に興味を持っており、日本語を私たちが思っているよりもはるかに高いレベルで話すことができた。

今回研修に参加したことで、改めてコミュニケーションの楽しさや異文化の面白さを体験できた。そして、自分自身に自信を持つことができるようになったと感じている。多くの時間を私のために使ってくれた、バディや友人、ルームメイトには感謝をしても仕切れない。これで終わりではなく、今後も交流を続け、さらなる成長を目指したい。

大学内の様子

大学の夜市で購入した臭豆腐

「台湾研修を終えて」

芸術地域デザイン学部１年 鬼束響生

① 台湾研修に参加した経緯

私は将来地域の芸術文化活動を支援し、小学生や中学生を対象に「アート×地域創生」をテーマとした教育プログラムを作っていきたいと考えている。日本では海外と比較してアートが日常に溶け込んでいないため、自分から行動を起こさない限りはアートに触れることができない環境になっている。「そんな今の状況を変えていきたい！」そう考えるようになったのも台湾研修を目指すようになってからだ。

高校２年生の時の探求活動で身近な地域の問題を解決するために、宮崎県に生息する珊瑚を取り巻く現状と、特技のバレエを生かした「作品創作」に挑戦したことがきっかけとなり、在学中に小・中学生を対象としたワークショップを企画し、地域保全や活性化に繋がる教育プログラムを作っていきたいと考えている。小さい頃からアートに触れる場があることで、人の心だけでなく地域や国までも豊かにすることが出来るからだ。台湾では子供がアートに触れる環境が常に身近にあることから、「芸術を社会に活用する方法を学び、アートと教育に対する幅広い視点や価値観を持ちたい」と思ったのが、今回台湾研修に参加した動機だ。

② 日本と台湾の文化の違い

約１ヶ月間の台湾研修を通して、台湾人のアートに対する捉え方が日本人とは大きく異なるなと感じた。高校３年生の時に参加した地域のお祭りを創るイベントから、私は芸術活動を通して地域と人々にどのような結びつきが生まれるのかについてとても関心がある。

台湾ではアジア最大級の芸術祭「台湾国際芸術フェスティバル(TIFA)」が毎年行われたり、政府とデザイナーが共同で街づくり行うなど、国全体で芸術を支援することに力を入れているため、街中の至る所でアートスペースが広がっているのが見受けられた。その中でも特に印象に残っているのは、大学の近くにある物流倉庫だ。日本の倉庫は同じような外観で建てられることが多く、どうしても堅いイメージを持たれがちだが、台湾の倉庫には可愛いモチーフの絵が描かれており、各倉庫の外観を異なるデザインにすることで、市民が親しみやすい空間になっていた。このような空間が身近にあることは街の活気にも繋がるため、地域と人々がアートを通してどのように結びついていくのか、その仕組みを実際に知ることができ、アートに対する視野がさらに広がった。

③ 授業について

研修の中で特に感銘を受けた授業は「Music & Art」だ。国立東華大学の芸術学部には誰でも無料で入れるコンサートホールがあり、学生自ら主体となってライブパフォーマンスを行える環境があることに驚いた。音楽とアートの関係性だけでなく、劇場と市民の関わり方や世界各国の伝統芸能など、佐賀大学芸術地域デザイン学部では学べない舞台芸術の分野を理論と実践の両方から学ぶことができたため、授業を通して横断的な視点が得られた点がとても良かったと思う。

対面では４回ほどしか受講できなかったが、

台湾研修に参加する動機ともなったアートと教育に対する幅広い価値観を持つことができ、芸術を世の中の役に立てるための手段や仕組みを学べたことは、自分の将来に繋げていくための第一歩になったと考える。たため、研修での学びを今後の活動に繋げていきたいと思う。台湾研修を通して学んだことを最大限に活かしながら、自身のさらなる表現法を追求していきたい。

④ 研修を終えて、今後どのように活かしていきたいか

約１ヶ月間の台湾研修を終えて、今後私は子供が身近にアートに触れられる場を作っていきたいと考えている。①でも述べたように、在学中に【 アート×地域創生 】をテーマとしたワークショップを企画し、地域の活性化に繋がる教育プログラムを作っていきたいと考えているため、アートのさらなる可能性を探りながら地域課題を発見し解決していく力や情報を発信していく力を身につけていきたい。

地域活性化に繋がる教育プログラムを作っていくにあたって、まずはユーザーの共感を得るためにインタビューすることが重要だと考える。ワークショップでは客観的思考による顧客ニーズを起点として常にユーザー視点で考えることが求められるため、ユーザーの意見は宝物だ。共感を集めていくためにあと３年間という限られた期間の中でどのように行動していけばいいか、今自分は何をすべきかなど、より明確なビジョンを持って過ごしていきたいと思う。

また、昨年末に立ち上げた Rish01（起業サークル）を通して、佐賀大学の美術館横にあるカフェを再興していきたいと考える。研修中に台湾の文化施設や美術館に訪れ、文化事業の成り立ち・運営について比較研究することができ

「台湾研修を通して」

経済学部 1 年　坂本陽菜

私は留学に興味があったこと、英語と中国語の向上を目指していたこと、異文化に触れて国際的な視野を持ちたいと思ったことから、このプログラムへの参加を決めた。

大学について

東華大学では、8 コマ、20 時間の授業を受講した。教養科目は、意見交換や発表を積極的に行うような授業だったのに対し、専門科目は日本と似たような座学の授業が多かった。それぞれ印象に残った授業を述べようと思う。教養科目である「English learning and popular culture」は、学生が自分の好きな音楽について 20 分程度発表するという授業だった。どの学生も自分の好きな曲について流暢に発表しており、プレゼンのスキルも高く、ハイレベルな授業だと感じた。先生の英語のスピードも速く、最初は聞き取るのが難しかったが、慣れてくるとたくさんの新しい曲を知ることができる、とても楽しい授業であった。専門科目である「Introduction of Big Data」や「Calculus」は、テキストに沿って授業が進められ、宿題の確認を行うという座学スタイルの授業だった。小テストも頻繁に行われ、予習・復習に多くの時間を割かなければならず、日本の授業よりも大変だと感じた。

言語について

英語ができれば大丈夫だと思って台湾に行ったが、思っていたよりも英語が通じない場面が多かった。特に、窓口での手続きやレジで、英語が話せない人とのコミュニケーションに苦労した。相手の言っていることが分からなければ、自分の言いたいことも伝わらないというときが度々あった。

台湾は、公用語が中国語（繁体字）であるため、ポスターや駅の電光掲示板などを見ても、大まかな意味を理解することができる。しかし、中国語と日本語では漢字の発音が異なるため、会話は全く理解できなかった。前々から中国語に興味を持っていたので、Duolingo や本などで少し触れていたが、その程度では日常生活でほとんど使えなかった。中国語に関してはこのような状態であったが、バディ同士が中国語で話している会話の内容を知りたい、実際に中国語で会話してみたいと強く思うようになり、基礎中国語の授業を受講し、スキマ時間でも自主的に勉強するようにした。その結果、リスニング能力ゼロであった渡台初日と比べて、格段に中国語を聞き取ることが出来るようになった。例えば、商品を買うときの値段や、授業中に先生が話す言葉、簡単な日常会話などである。バディ同士での中国語の会話や道端の人の会話を理解できたとき、何も分からなかった言語をこんなに理解することが出来たのだと感動すると同時に、言語を学ぶ楽しさを改めて実感することができた。また、実際に、バディから正確な中国語の発音を直接教えてもらえるという、貴重な環境の中で中国語を学ぶことが出来て良かったと感じている。

生活について

台湾での生活を通して、日本との文化の違いを発見することができた。例とし

て、バイクを利用する人が多いこと、トイレの設備が異なっていることなどがある。また、台湾は、外食文化であるため、3 食すべてをコンビニ・学食・レストランで食べることがほとんどだった。台湾のご飯の特徴として、香辛料である八角がほとんどの料理に使われているということが挙げられる。私は、八角を使用したルーロー飯や牛肉麺が好きだったが、中には苦手な人もいた。ルーロー飯・牛肉麺ともに店によって味が全く異なるため、食べ比べをして自分の好きな味を探すのが楽しかった。また、タピオカミルクティーも店によって甘さやタピオカの食感が異なるため、自分のお気に入りを見つけるという楽しみもあった。

平日は、授業や洗濯、部屋の掃除等をしていたためあまり遠出はせず、夜に食堂の近くで佐大生やそのバディと話したり、近くの夜市に行ったりしていた。休日は、ルームメイトやバディと一緒に花蓮市を散策したり、ショッピングを楽しんだりした。また、授業が無い日をうまく使い、週末に 2 泊 3 日の台北旅行や、ホエールウォッチング、日帰りの宜蘭旅行にも行くことができた。特に、歴史的建造物である国立中正記念堂や十分でのランタン飛ばしなど、日本では見たり体験したりすることのできないことばかりでとても新鮮だった。一緒に旅行に行ってくれたルームメイトとバディには改めて感謝を伝えたい。最初はお互いに人見知りをしていてバディとうまく話せなかったが、一緒に時間を過ごすうちに仲良くなり、最後には手紙の交換をするほどになった。そして、最終日に駅まで見送りに来てくれた時はとても嬉しかった。バディの中には日本語ができる人もいたため、困った場面で色々と助けてもらい、本当に感謝している。国を超えて友達になることが出来て良かったし、留学が終わった今でも連絡を取っているので、ここでのつながりを大事にしたいと思う。

この台湾研修を通して、多くの人の優しさに触れ、助けてもらいながらたくさんのことを学ぶことができた。日本いたらこのような体験をすることは出来なかったと思うので、非常に貴重な経験となったと考える。特に、言語と文化面について改めて考える機会になったと感じている。当初の目標である英語力の向上は少ししか達成できなかったが、中国語やコミュニケーション力の向上といった面に関しては大きく成長することができた。文法などが少し不完全でも、積極的

に話そうとする姿勢が身に付いたと感じる。これからも英語・中国語ともに学習を続け、TOEIC 等だけではなく HSK にも挑戦してみたいと思う。そして、今後もこの経験を活かし、国際的な視野を持った人材として成長していきたいと考える。

「SUSAP2025 國立東華大学短期プログラム」

芸術地域デザイン学部　堺梨音

　私は、SUSAP 2025 Spring 國立東華大学・交換留学体験プログラムに参加した。

最初に、この留学プログラムに参加した経緯について記述していく。

　まず、第一に、私が、この「SUSAP 2025 Spring 国立東華大学・交換留学体験プログラム(台湾)」に参加した経緯としては、そもそも大学に入る前の高校時代に大学生になったら留学をしたいとおもむろに考えていたというのが理由の一つとしてある。

そして、佐賀大学に入学した後、私は、副専攻で「欧米の言語・文化副専攻コース」という英語のコースをとり、英語をより深く学び、欧米圏だけでなく、講義を通して様々な国の文化を学んだり、同じ授業で一緒になった留学生の人と友達になってさまざまなことを話しているうちに、「留学をしてもっと国際的な環境に身を置きたい」、「日本語ではない英語や他の言語しか通じない環境に身を置きたい」という思いが強くなったということがこの留学を決めた第一の理由である。

　第二に、以前から台湾に興味があったことが理由として挙げられる。私が通っている、佐賀大学では、私は、芸術地域デザイン学部に所属している。台湾では、現代アートが発展しているので最先端のアートを学びたいと思った。さらに、台湾の建築に興味があり、風水を大事にして作られていると学んだことがありそのことについても自分の目で見てみたいということからこのプログラムに参加したのである。

　第三に、私の周りに、以前この台湾の東華大学の短期留学プログラムに参加していた友達が多くいたというのが理由の一つとしてある。その友達にこのプログラム内容や、成長したこと、実際に行ってみて感じたことを聞いていくうちに、台湾を選択肢に入れて最終的に、自分の金銭面と以前行った人たちの感想を聞けて現地での暮らしや充実度が想像しやすかったことから、台湾を選び國立東華大学に来たのである。

　第四に、幼少期に私は、「マレーシア」という国に 3 年間住んでいた。

マレーシアに住んでいる間も、主にアジアであるが、たくさんの国に行った。

しかし、台湾には行ったことがなかったため、同じアジアでもどのような違いがあるのかということが気になり、台湾の衣食住や文化を学びたいと思った。さらに、現地の保育園に通っているときに中国語を学んでいたが、ステップアップしたいと思ったため言語の分野で、英語だけでなく世界で使われている言語のトップ 3 に入る中国語も学べたら、私の将来の願望である、国際的な仕事で活用できるなと思い、このプログラムを選択した。

　以上の理由から、私は台湾で学ぶということを決意し、このプログラムに参加したのである。

　次に、このプログラムに参加して、実際に台湾での生活や国立東華大学で肌で感じたことや気づいたことを記述していく。

気づいたこととしては、出会う人が、みんな親日家であるということである。バディはもちろん、バディ以外の人もさまざまなことを気にかけてくれるし、みんな

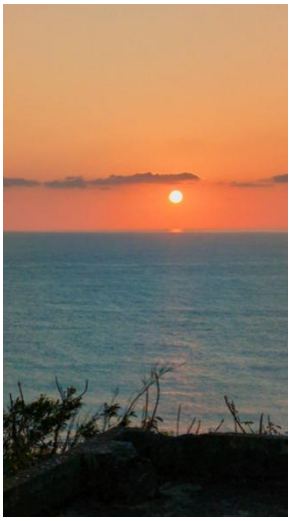
親切である。日本と同様に、なんなら日本以上に「おもてなしの心」を感じる機会が多々あった。学校の人だけでなく、外のレストランや夜市の出店者でさえも気さくにとても親切に接してくれた。この、台湾で出会った人が親日家ということに加えて、驚いたことがある。それは、日本語が通じる人がどの世代にもいるということである。この国立東華大学でも、自分や他の日本人留学生の人たちのバディは日本語が基本的に通じるのだが、それ以外の授業で一緒になった現地の台湾人の人たちがほぼ日本語が通じたということに驚いた。理由として、台湾人の友達に聞いてみたのだが、日本が台湾を統治している時代に、日本語を勉強することを条件とさせられていたのが一番の理由であるらしい。確かに、どの世代の台湾人も一定数、日本語を話せるなと感じてはいたが、特に私たちより上の高齢者世代に流暢な日本語を話せる人たちが多いなと感じていた。私が感じたのは、若い世代が日本語を話せる人が多いのは、もちろん、おばあちゃんやおじいちゃんから日本語を習ったというのも理由の一つとしてあるとは思うが、日本のアニメや漫画文化がとてつもない大きな影響を及ぼしているなと感じた。私は、とてもアニメや漫画に詳しいとは言えないが、ある程度知っていると思っていた。しかし、台湾の人たちは、みんな詳しく、漫画やアニメから日本語を学んでいたり、国立東華大学で開講されている日本語の授業をとったり、中には日本語を独学で学んでいる人もいてとても驚いた。

また、食事文化についてだが、台湾の国立東華大学にいる間、休みの日を使ってたくさんの場所に足を運んだ。台湾一周をした時は一番台湾の各地の文化も食文化もありとあらゆるものを経験できた。そこで気づいたこととしては、南下するにつれて、同じ食べ物だとしてもどんどん味が甘くなっていくことに気づいた。さらに、私は、大学近くのお店や台湾一周している間に台湾グルメを堪能してお気に入りの料理を見つけることができた。私のお気に入りの料理は、葱抓餅である。似た料理として葱油餅というものがあるのだが、これら葱油餅と葱抓餅の違いは、葱油餅は生地を成型した後そのまま油で揚げ焼きをする。しかし、反対に、葱抓餅は生地を焼くときに葱油餅と比べるとそこまで多い油は使わず、コテのような調理器具を使って空気を含ませて細かな皺を作る。この工程を踏むことで生地に厚みと層ができて独特なふわふわな食感ができる。私は、この葱抓餅がとても大好きになり大学の近くの葱抓餅屋さんの店主の人と仲良くなり、中国語で注文する方法も少し教えてもらった。

大学の講義のことだが、たくさん授業をとったのでここのレポートでは、自分の専攻に絡めた芸術の授業のことについて論じることとする。

私は、日本の芸術の教え方と台湾のここの国立東華大学の芸術の教え方と比較すると、圧倒的に台湾の教え方の方がいいなと私は感じた。その理由としては、日本

の芸術の教え方は、ある程度、基礎を踏まえた上での人たちが講義を受けるのはいいと思うが、ここの台湾の国立東華大学での教え方は、自然を絡めて教えているので、基礎の基礎から教えて身の回りのものに感謝しながら生きていけそうなのでとてもいいなと感じた。

ここの台湾の国立東華大学での生活で、たくさんの人と出会い、旅行中にもたくさんの人たちに支えてもらった。最初は、35 日は少し長いかなと思っていたが、今こうして振り返ってみると、たくさんの人からの愛を受け取り、毎日友達や台湾の人たちと笑ってたくさんの大切な素敵な思い出を作り、今では、もはや台湾に今すぐに帰りたい、もっとみんなと一緒にいたかったという気持ちがある。ここで、学んだことを胸に、日本でも生かしていこうと思う。そして、今回のこの短期の留学を機に、私は、本気で長期留学を考え始めた。さらに、またこの国立東華大学で学びたいと感じたため、本気で中国語を学び始めてみようと思う。現に、私は、帰ってきてから長期留学のことや留学の必要最低条件を調べ HSK という中国語のワールドワイドに使える検定の本を買って勉強し始めた。さらに、台湾で仲良くしていた友達にも中国語をオンラインで教えてもらっている。

最後に、この 35 日間、支えてくれたバディや授業で一緒になっていろんなところに連れて行ってくれた台湾の友達、たくさん一緒に笑った、いや、もはや笑いすぎで毎日筋肉痛にしてくれたルームメイトのみんな、先生方、本当にありがとうございました。全てが最高の思い出です。毎日がとても幸せでした。たくさんの愛を受け取ることができました。いつか恩返しできるようにこれからもっと頑張ります。